白河だるま

（福島県指定伝統的工芸品）

白河だるま紹介映像を見ながら学んでいる様子。

絵付け体験中。筆を使って描くのは難しい。

キャラクター・干支や祝い用など、だるまも多様化

場所：白河市　だるまランド（白河市横町３０）

白河だるまとは

白河だるまは寛政の改革で有名な松平定信公「市民の生活をより元気に」という想いから幸運をもたらす縁起物として誕生しました。

家族の健康や会社の繁栄、高校や大学の合格や選挙での当選など古来より人々が何かを願う際は必ず白河だるまがそばにあり、たえず人々の夢や希望を応援し続けてきました。今日では白河では毎年２月１１日には約１５万人が訪れる。「白河だるま市」が開催されるほど市民に親しまれています。

また、江戸時代に起きた天明の大飢餓の際に、白河藩では餓死者が一人も出なかったとされており、「どんな苦しい状況下でも諦めない」七転び八起きの精神を大切にしています。

白河だるまの特徴

白河だるまは幸運の象徴とされている「鶴亀松竹梅が顔の中に描写されているのが最大の特徴でありそのデザインは、かの有名な絵師・谷文晁が行ったとされています。また、願い事をする際はまず、だるまの左目に目を入れ、成就したら右目を入れるという風趣があります。

PHOTOSPOT

巨大！だるまガチャ！

階段を上った先に、全長2メートルの巨大なだるまのガチャが待機！500円で1回ガチャっと回せば、500円以上のものが必ずもらえる、大興奮な楽しいガチャポンだよ！
1等には、豪華景品が・・・・！

SHOPPING

白河を持ち帰ろう！

ここでしか買えない限定モデルのだるまをはじめ、福島にちなんだ商品の数々が並ぶ物販エリア。
白河の魅力を一通り楽しむことができる、アンテナショップ！
お土産に、福島の名産品を是非どうぞ！

WORKSHOP

ワクワク！絵付け体験！

だるまの製造方法を学んだなら、是非とも実践してみたいところ！そんなあなたの願い、叶います。
物販体験場の絵付けエリアにて、だるまの絵付け体験ができるよ！体験後に認定される、「だる★マイスター」にチャレンジしてみよう！

・所要時間：約30分　・料金：650円

GAME

だるまさんが転んだげ～む！

自分が描いただるまで参戦する、だるまさんが転んだげ～む！
最大で8人同時プレイが可能。巨大ディスプレイで、誰が一番に鬼だるまにタッチできるか競争しよう！また、描いただるまは記念にプリントアウトしてプレゼント！専用のかわいいクリアファイルが付いてくるよ！
これはやるっきゃないね！

・所要時間：約5分　・料金：500円

まほろん
（福島県文化財センター白河館）

懐かしい昭和レトロな様子

昔のお膳料理なども展示

県内で出土した土器など多数展示

場所：福島県文化財センター（白河市白坂一里段８６）

まほろんについて

福島県文化財センター白河館（まほろん）は、「遺跡から学ぶ自然と人間とのかかわり」を活動のテーマとした“見て・触れて・考え・学ぶ”体験型フィールドミュージアム。福島県内各地の遺跡から出土した文化財を保管し、それらを活用しながら展示会や古代の技術を学ぶ体験講座、イベントを行っています。

まほろんの役割

1．文化財の保存処理・収蔵・保管と活用
2．文化財関する情報発信
3．文化財の展示と講演会等の開催
4．文化財に親しむ体験学習
5．文化財を担当する市町村職員等の研修

見どころ

屋外には、縄文時代の家や奈良時代も米蔵などの建物が復元されており、施設内の展示と合わせ、各時代の人々の生活の様子が分かるようになっています。特に、児童・生徒の歴史学習の場として最適な施設です。復元品を見たり触れたりすることで、教科書だけでは学ぶことができない人々の生活の知恵と技術を実感することができます。

夏休み期間中は休館せず、特別メニューや夏祭りなどのイベントも行われていますのでぜひホームページ等チェックしてみてください。

←大里の桑名邸から発掘された大型の土器。

桑名邸遺跡は県南半最大級の遺跡とのこと。

※収蔵庫内に保管。

大堀相馬焼
（国指定伝統的工芸品）
（福島県指定伝統的工芸品）

今回は絵付け体験。色や絵柄を悩みながら世界に一つだけの作品を思考中。

ギャラリーにて大堀相馬焼の歴史など説明を受けている様子。

教わったとおりには描けず、講師より丁寧にゆっくりと解説を受けている様子。

講師の山田さんはあっという間に迫力のある馬の絵を描いてしまいます。

場所：白河市　錨屋窯（白河市池下３３）

大堀相馬焼の歴史

元禄３年（西暦１６９０年、江戸時代・徳川綱吉の時代）欧州相馬領大堀村（現在の浪江町大堀）の郷士である半谷休閑の下僕佐馬が陶器づくりを志し、相馬中村城下にて相馬藩窯（田代窯）の陶工としてその技法の習得を目指しました。後に郷里の大堀に帰り、隣村の井出村美森で陶土を発見して茶碗の焼成に成功したのが、大堀相馬焼の始まりと伝わります。江戸末期には１２０戸の蔵元を擁し東北一の大窯業地帯となりました。その後、明治の廃藩置県や昭和の戦争などを乗り越えて、１９７８年には国の伝統的工芸品の指定を受けました。東日本大震災前は２３軒の蔵元が焼物づくりに取り組んでいましたが、原発事故で一次生産が中断。現在は約半数の蔵元が生産を再開して、伝統を絶やさないよう努力を続けています。

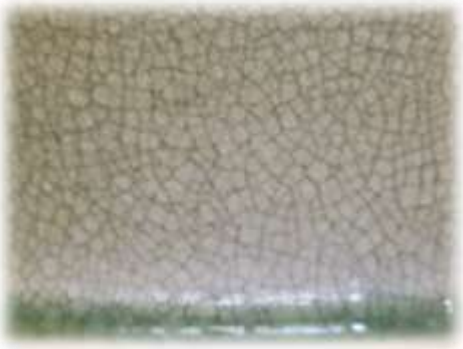
錨屋（いかりや）窯　十三代目　窯主　山田慎一さんの紹介

錨屋窯（いかりやがま）は、江戸時代より現在まで代々続く「大堀相馬焼」の窯元です。製鋼業を始める前は欧州相馬領大堀村（現在の浪江町大堀）で宿屋を営んでいて、当時の相馬中村藩主が立ち寄られた際に「此の地に如何なる事があっても流されることなく留まれるように」と船の錨から「錨屋」の屋号を戴いたと伝わり、家系図を見ると山田さんで十三代目とのこと。創業より約３３０年、浪江町大堀の地で焼物づくりを続けてきましたが、２０１１年の東日本大震災の原発事故により白河市に避難。多くの人たちに助けられて２０１３年に本格再開し、この度、南湖公園の近くに新しい窯と店舗を開かさせていただくことになりました。商品をお渡しして終わりなのではなく、日常の風景や大切な記憶の一部になることを想いながら、焼物づくりに取り組んでいきます。

大堀相馬焼の特徴

１．青ひび

ほとんどの大堀相馬焼は、貫入と呼ばれるひびが器の表面に拡がった模様になっています。これは陶器を約１２３０℃で焼成し、徐々に冷ましていく過程で、年度と釉薬の収縮率の違いから生じる現象です。このひびに墨をすり込み、磨き上げると黒いひび模様が浮かび上がります。１８６３年（江戸時代・文久３年）頃から青ひび（青磁）釉薬が使用されはじめたと伝わっています。



２．駒絵

諸説ありますが、相馬中村藩の時代に田畑を耕す農耕馬を訓練し戦場に仕立て、他藩から民を護った「御神馬」を描いたもので、狩野派の筆法といわれています。駒絵は「走り駒」や「左馬」とも呼ばれ、家内安全などを祈念した縁起の良い図柄とされてきました。左を向いた馬には「右に出るものがいない」という意味も込められ、１８３０年（江戸時代・天保１年）頃から描かれたと伝わります。

３．二重焼き

二重の構造は大堀相馬焼独特の技法で、製作には熟練が必要です。魔法瓶のように器の内側に空気の層があるので保温性が良く、熱い湯を入れて手に持っても熱くありません。ハート形に見える穴ですが実は「千鳥」を表しており、竹で描いた模様は「波」を表しています。１８６７年（江戸時代・慶應３年）頃から明治維新の頃にかけて、二重焼きが考案されたと伝わります。

※錨屋窯紹介パンフレット引用